特集

CT Colonography Update

大腸がん診断が変わる！

CT Colonographyがもたらすイノベーション

企画協力：飯沼　元
国立がんセンター中央病院放射線診断部

近年，食生活や生活習慣の欧米化などにより，日本の大腸がん患者は急増しています。大腸がんはいまや，日本人に多いとされていた胃がんを抜き，がん罹患数では第2位，死亡数では第3位であり，女性に限れば死亡数で第1位となるに至りました。大腸がんは早期に発見すれば治癒する確率が非常に高いと言われていますが，注腸X線検査や大腸内視鏡検査に抵抗感を持つ人が多いことや，内視鏡医のマンパワーが不足していることなどから、精密検査の受診率は低迷し，現実にはなかなか早期発見が難しいことが課題となっています。

そこで注目されるのが，急速に進歩した多列CTを用いる侵襲の少ないCT Colonography（CTC）です。欧米で先行したCTCは，日本では国立がんセンターを中心に臨床研究が進められ，2007年からは毎年，JRC前日にCTコロノグラフィートレーニングコースが開催されるなど，普及に向けた取り組みが行われています。最近では，多くの関連企業がCTCに関する技術開発に参入し，国内での多施設共同臨床試験も開始されるなど，CTC普及の兆しが高まりつつあり，2010年は大腸がん診断における変革と進歩の年になりそうな予感がします。

そこで今回，CTCの現状と動向を網羅し，新しい大腸がん診断を考察する特集を企画しました。CTCの進歩と有用性が正しく認識され，評価されることで，CTCの普及に貢献することを願うものです。